

投手分業制の理由

先発投手の負担軽減と故障防止

登板数や投球数が増える、当然投手の肩やひじに負担がかかる。特に、先発完投が当たり前だった時代には、若くして投手生命を絶たれる投手も少なからずいた。そこで各球団は、大事な戦力である投手を怪我のリスクから守るため、先発・中継ぎ・抑えの分業制を採用したのだ。

抑え投手として年俸も3億円を超えた。一流の抑えは一流の先発よりも金を稼げた。抑えという概念がプロ野球に定着した証だ。

佐々木が大洋に入団した当時の監督・須藤豊は「チームで最もいい投手が抑えを務めるべき」という信念があった。佐々木は、最速155キロの直球と数種類のフォークで勝負するタイプの投手。入団から1年あまり先発をまかされていたが、中盤に球威が落ち、スタミナ面で課題の残る凡庸な投手だった。そこで須藤監督は佐々木を抑えに起用。するとどうだ。3

者連続三球三振など見違えるような投手になった。やがて佐々木を見るためにファンが球場に足を運び、各球団から怖れられ、日本一の抑え投手になり、抑えとしては3人目となるMVPを授賞(2人目は中日の郭源治)、メジャーリーグでも抑えとして成功するに至ったのだ。

抑え投手が定着しつつある中、80年代になると、抑えの前に中継ぎを据え、「先発→中継ぎ→抑え」という継投策が一般化した。

85年に阪神が日本一になったときは中西清起・山本和行・福岡納の3人がフル回転でブルペンを支えた。90年代には、佐々木主浩のいた大洋(横浜)が、先発→盛田幸妃→佐々木という勝ちパターンの中継投策を採用。

また、巨人の長嶋茂雄監督が勝ちパターンのリリーフ継投を「勝利の方程式」と名づけ、96年からNPBで最優秀中継ぎ投手賞も制定され、中継ぎ投手の地位も徐々に向上していき。

それまでは中継ぎ投手が1試合に複数のイニングにまたがって登板する「イニングまたぎ」は当た

り前だったが、このころからイニング限定が一般的になっていった。

05年、阪神の岡田彰布監督は1試合での球数や投球イニング、キヤッチボールや登板間隔まで細かく管理する継投策を導入し、勝ちパターンJFK(ジェフ・ウイリアムス、藤川球児、久保田智之)は長く活躍するに至った。また、11年には中日の浅尾拓也が中継ぎ投手としては初のシーズンMVPを受賞している。

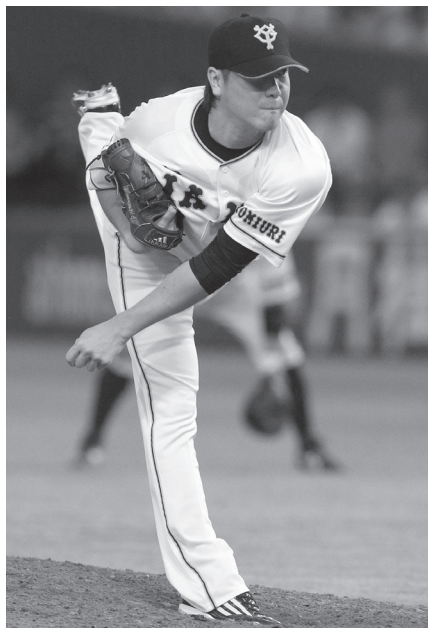
中継ぎ投手の地位の向上は、契

約面や年俸面からもわかる。巨人の山口鉄也やソフトバンクの五十嵐亮太などが複数年契約を結び、平均年俸も3億円を超えるまでにいった。

今や先発→中継ぎ→抑えの分業制は当たり前。いずれも必要不可欠な仕事なのだ。もはや「中継ぎ降格」なんて言葉は使えない。

先発や中継ぎ、抑えに限らず、投手の投球姿勢や投法にもトレンドがあるようだ。

投手フォームは、走者さえいなれば、かつてはウィンドアップポ



巨人のセットアップパーとして、長年活躍を続ける山口鉄也